

大川鉄工所 一〇〇年物語



株式会社 大川鉄工所

創業100周年記念誌

創業 100 周年記念誌

大川鉄工所 100 年物語

祝 辞	2
ご 挨拶	4
大川鉄工所 100 年物語	5
大川鉄工所の歩み	10
100 年 その先へ	12





祝

辞

株式会社大川鉄工所創業 100 周年に寄せて



北海道知事

高 橋 はるみ

株式会社大川鉄工所が、創業 100 周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

貴社は、大正 8 年 4 月に北海道・小樽の地に創業されて以来、船の錨などの鍛冶製品、木造船の金物や刃物の製造といった、時代に応じて地域経済が必要とする製品を提供され、現在では、鉄骨の加工から施工まで一貫した製品提供により社会資本整備を支えるなど、その高い技術力で、道内外から幅広い信頼を築き上げてこられました。

とりわけ平成 10 年に、当時、北海道でも数少ない H グレード工場の大匠認定を取得するなど、お客様からの高度なニーズに応えられる企業として常に評価されています。

また、産業の担い手不足や高齢化など、技術の伝承が困難になりつつある時代の中、従業員の様々な資格取得を支援するなど、将来を見据えた人材の育成に努められているほか、地域の多様なイベント運営に参加されるなど、本道のものづくり産業や建設業の発展はもとより、地元小樽の地域づくりにも多大貢献を果たされてきたことに、深く敬意を表します。

今年は、北海道命名から 150 年という大きな節目の年です。先人から受け継いできた豊かなふるさとを、次の世代にしっかりと引き継いでいくため、地域経済を支える産業の振興をはじめとする各般の施策を推進してまいりますので、今後とも、ご理解とご協力をお願い申し上げます。結びに、地元小樽と北海道にとって、かけがえのない企業である大川鉄工所が、この創業 100 周年を契機に更なる発展を遂げられますこと、並びに関係の皆様のみずみずしきご活躍とご健勝を心から祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



創業 100 周年をお祝いして

小樽市長 森 井 秀 明

株式会社大川鉄工所が創業 100 周年という節目を迎えられ、ここに記念誌発刊に当たり祝文を寄稿させていただく機会をいただきましたことを、光栄に存じます。

さて、株式会社大川鉄工所は、大正 8 年に故大川元蔵社長が、船の錨やカスガイ等の鍛冶製品を製作する企業として創業され、その後、フィゴを使った金物や刃物製造など現在の鉄工所としての基盤を確立されました。現在では、建築鉄骨の加工、溶接、塗装から納品、組立まで行う企業となり、平成 10 年には、当時社長でありました大川紘司会長の念願であった H グレード鉄骨製作工場の認定を受けられました。その後も公共施設をはじめとした様々な施工を手がけられ、まちづくりに貢献されていることは、誠に御同慶の至りであります。

本市は鉄工業をはじめとする「ものづくりのまち」であり、市内経済が持続的に発展していくためには、地場産業の成長発展が重要であると考えております。小樽の歴史とともに成長され、100 年の長きにわたり蓄積された御社の技術は小樽の財産であり、今後も地域経済を牽引していかれますものと期待しております。

結びになりますが、御社の今後益々の御発展と、大川紘司会長並びに大川晃弘社長はじめ皆々様の御健勝、御活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



創業 100 周年をお祝いして

J F E スチール株式会社

代表取締役社長 柿 木 厚 司

株式会社大川鉄工所殿が創業 100 周年を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げますとともに、平素からのご高配に対しまして厚く御礼申し上げます。

貴社は、大正 8 年に創業、建築金物制作を経て、昭和 39 年からは工場を小樽市色内へ移し鉄骨制作、平成 10 年に現在の小樽市高島へ工場を移転、同年に小樽市唯一の H グレード取得と生産体制を確立されました。そして小樽市内はもちろんのこと、北海道内の多くの建築物を手掛けてこられました。外注業者に頼らず製品を制作される姿勢で現在まで H グレードを維持されていることは、社会に信頼される製品を制作されている証であり、それが安定した経営につながっていることは大変喜ばしいことであります。これも経営陣はじめ従業員の皆様のご努力の賜物と敬服いたすところであります。

貴社と弊社との取引開始は約 30 年前に遡ります。以後現在まで建築鉄骨用鋼材を安定的にご購入いただいているだけでなく、弊社のグループ会社である JFE シビルのシステム建築協力代理店になっていただくなど、JFE グループ各社とも親密にお取引いただいております。また、貴社は JFE スチール北海道建材会のメンバーとして幅広い分野でご活躍されており、貴社と JFE グループの間には強固な相互信頼関係が存在し、今後もその関係はますます強まることと確信いたしております。

今後も不透明な時代ではありますが、貴社が 100 年をかけて培ってこられた経営・製造のノウハウを活かし、一層発展されることを祈念いたしましてお祝いの挨拶とさせていただきます。



次世代につなぐ ～創立 100 周年で思うこと～

株式会社 大川鉄工所 会長 大川 紘 司

当社は本年、お蔭様を持ちまして創業百周年を迎えることとなりました。初代が町中で鉄工所を創業、以来今日までの年月は、国にとっても市民にとっても激動の時代でした。戦争、災害で経済や生活は混乱し、当社にとりましても試練の多い年月でした。この状況下で祖父及び父は、懸命に家業を支え力を尽くして参りましたが、これも偏にその時々のお得意様各位のご支援の賜物であり、改めて深く深く長年のご厚情に感謝し、お礼申し上げます。

現代の社会は、皆様ご承知の通り何事もテンポが速く、価値観が変わり様式が変わります。

英知を尽くし会社を維持し発展させることは、誠に困難なものがありますが、それを成し遂げ、次世代に繋ぐそれが、よき日本、よき北海道を守る礎と信じるものであります。

今後も絶え間なく努力し、お客様各位のご要望に応えるべく社長始め社員一同、研鑽し努めるとは存じますが、至らぬ所も多々あるかと思いますので、今後ともご指導ご厚情を賜りますよう心からお願い申し上げます。



株式会社 大川鉄工所 代表取締役社長 大川 晃 弘

株式会社大川鉄工所はおかげさまで創業 100 周年を迎えます。これもひとえに皆様方の温かいご支援とご愛顧の賜物と厚く御礼申し上げます。100 年という長い年月を振り返りますと、大正・昭和・平成と 3 つの時代を乗り越えて発展し継続してきたという自負と多くの皆様に支えられて今日があるのだという感謝の気持ちでいっぱいです。この 100 年は、戦争・大震災・大恐慌・高度経済成長・オイルショック・バブルの発生と崩壊・価格破壊・超円高・国内空洞化・リーマンショック等、様々な出来事が次から次へと起こった変化に富んだ時代だったと思います。21 世紀になった今、私たちの業界を取り巻く環境は大変厳しいものがあります。人口減少による働き手不足、それに伴う協力業者の減少等、日本の国の将来は大変不安定な状態です。

しかし、不安と心配ばかりでは前へ進みません。過去 100 年の歴史の中でも多くの困難を乗り越え、克服してきたからこそ今があるのです。弊社も日本の技術を信じながら、今後も技術革新と社会システムの変化の中で日本のものづくりを支援し、郷土発展の為に頑張っていきたいと思えます。創業 100 周年にあたり、「お取引先様と地域社会の発展に貢献できる会社」を目指して、これからも今まで以上に、製品・スピード・チームワークの充実をはかり、時代に合った新しい商品や会社づくりを提供して、お取引先様と地域の皆様から愛され、信頼される会社にしていきたいと思えます。これからも、皆様のご支援とご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

大川鉄工所一〇〇年物語

回想録

現社長四代目・大川晃弘の先代でもあり父でもある現会長三代目・大川紘司、そして祖父にあたる二代目・大川元一と親交のある栗田氏に当時の思い出を振り返っていただきました。



二代目 大川元一さんとの思い出

大川元一さんとの最初の出会いは、昭和30年代でした。当時私どもの取引先である建設業の会社では、それぞれ協力会社を擁して工事をされてましたが、仕事を円滑に進めるため、協力会社の会を作り、合わせて夫々の親睦をも図られました。私どもの会社もその会に参加し、その会合でお目に掛かり親しくして頂きました。以後、仕事の上でも色々とお世話になりました。

石山町にあった工場の入口の左側に、轆があり、鉄を赤めたものをハンマーで叩き、率先して作業をして職人さんに指示をされ、時には奥様もお手伝いされてました。奥様も暖かい人柄の方で、粗っぽくなりがちな工場を良くまとめておられました。

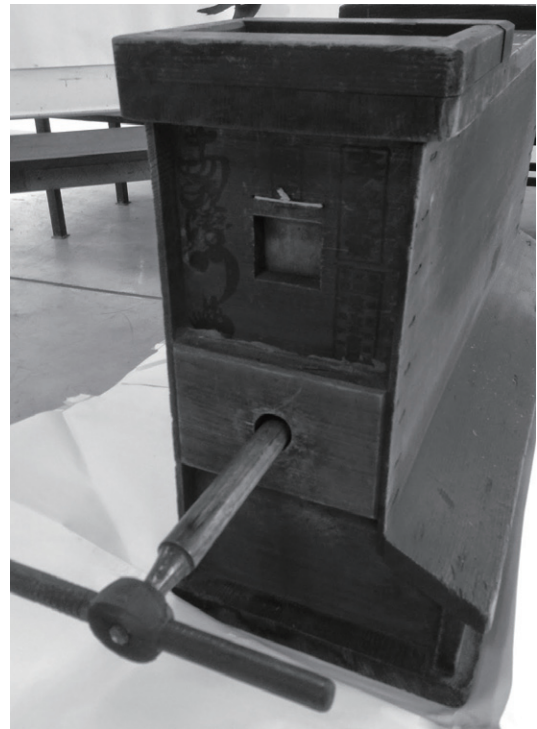
お仕事は、漁業に使用する金具や、高島にあった木造船の造船所で使用する金具などを製作されてました。その後、建築用の金物の比重が増えたように思います。出来上がったものは、リヤカーで配達、手宮の向上から高島、花園町までも行ったものだと思いい出話をされていました。

三代目に当たる紘司さんが入社されて、業務の中身も徐々に変わり、石山町から色内町に移られましたが、その折には奥様共々、大きな決断をされた事と拝察してます。お仕事も従来の建築や漁業に関するものから、鉄骨建築の主要を占める鉄骨の製作へと移行し、三代目紘司さんの成長を見守りながら、ご自分は従来の取引先のお仕事

に携わっておられました。

何事にも理非を重んじ、関係する方々からの信望は終生篤いものでありました。

その時々と言動や仕草は、折に触れて思い起こします。鞆まつりは、毎年初冬に行なわれる鉄工場のお祭りで、これまでのお仕事で不可欠な鞆に感謝する行事であった様に思います。従業員の方々、取引先、親しい方々などがお招きを受け、賑やかに楽しく行なわれました。日頃仕事では、厳しい方でしたがその時は、穏やかで行き届いたホスト振りが、内助の奥様のご様子と共に懐かしく思い起こされます。長年のご厚誼に厚く厚くお礼申し上げます。



当時使用されていた鞆（ふいご）と同じ型

三代目 大川紘司さんの若き頃

東京で鉄工の技術を学び、家業を継ぐべく帰郷された頃、石山町の工場で父君の仕事の手伝いをし、金具の製作に倦むことなく黙々と作業をされていたのが私との最初の出会いでした。その時の印象は、父君に対し実に素直で畏敬をされている方だと感じたのを鮮明に思い浮かべます。

家業はその後大きく転換、工場を移転し建築用の鉄骨製作を創められましたが、そこに至るまでの技術面、人材、受注の確保などなど創業者としての苦労を体験されました。無論ご父君の後ろ盾はありましたが、よく短期間に軌道に乗せられたとその道程を知る者として感じ入ったことでした。

当時小樽は、市を横断する国道5号線の拡幅があり、各所で店舗の建築がありましたが、その鉄骨受注、施工に全力で取り組み、高い評価を得られました。また、後志地区の工事にも積極的に受注活動をされましたが、その折りに同行し

たこともありました。

一般的には、親の事業を継いだ子供は、時代が違うとて親への報告や、意見を求める事が少ない様に見受けられますが、大川さん父子にはその様な事は全くありませんでした。得意先での交渉、仕事の進め方、工事完了後の入金状況などをその都度お話されている様子を垣間見たものです。

好不況の激しい業界にあって、地道な経営を貫かれ業容も拡大し、色内工場から現在地に移転されたのは、前社長がご他界されて数年後でしたでしょうか。

50年以上も家族同様のお付き合いを頂きましたが、他に比類のないような親孝心、お元気な頃のご両親に尽くされた数々、最晩年、病に在った時の介護など身近に拝見して感銘を受けた事も再々でした。

ご母堂様の最後の言葉「親孝行ありがとう」に全てが籠められていると拝察する次第です。

二人目の親父さん、大川元一様へ

あなたは、私が勝手に決めた二人目の親父さんです。信州から小樽に移って5年余り経ったころ、父から「親は子より早く死ぬ。この世で親ほど子の喜びや悲しみを、正面から受け止めそれを共に分かち合ってくれる者はない。親子の様なお付き合いの出来る方を得られるように心がけたらよい、人生がより豊になるよ」と教えられた。20代前半の時です。

会社関係者、仕事上や趣味での出会いは数え切れないくらい多くありその時々にお世話になり、知遇を頂いた方も沢山ありますが、その中で己の心の中で、密かに親のように思い40年余りも親しくさせて頂いた二人目の親父さんがありましたのは誠に幸せで、父の教えのように大きな励みにも喜びにもなりました。

あなたとの出会いは、建築関連の仕事で互いの生業（なりわい）としていた事で始まり、その大らかな人柄に魅せられました。

親父さん今、あなたは何をしておられますか。家業である鉄工場を継ぎ戦前、戦後の混乱した世の中で鞆（ふいご）を扱い赤くなった鉄をハンマーを振り上げてたたき、奥様と懸命に仕事に励まれたご苦勞を奥様と思い出しておられますか。立派な後継者になったご子息が会社を市内有数の企業に育て上げた様子を見ておられますか。それとも其方に行かれた皆さんと思い出話をしておられるでしょうか。

親父さんは人情に厚い方で、困った人があれば何時でも手をさしのばす方

でしたね。それを利用され窮地に立たされた時があっても余り苦にする風もなく、泰然としておられました。また物事の理非、けじめに厳しく理に添わぬものには決して良しとしない一徹な面もありました。数多くの事を学ばせて頂きましたが、同時に私が取引先や子育てのことで悩んだり、困ったときに親身になって聞いてくださり、助言や叱責を頂きました。それがどんなに心強かったことでしょうか、感謝のほかありません。お宅には迷惑をも顧みず実家のように出入りしましたが、奥様のぬくもりのある人柄なくしてこのような振る舞いは出来なかったと思い、お二人に感謝のほかありません。

時にはドライブや温泉に行ったり、教えて貰った花札に興じることもありましたね。忘れられないのは、伊豆旅行をご一緒したとき、宴会の最中に心臓発作で私が倒れ救急車が来るまで付き添って、話しかけたり私の胸をさすって下さいました。実の親でも及ばぬご心勞をお掛けし彼の地で入院中も、小樽に戻ってから篤いお心遣いを頂きました。両親は既になくこの歳で親の役割を担って下さる方が在る幸せをしみじみ、感じたものでした。

親父さんが社業の大半をご子息に任せられ、私も実務を終え温泉や小旅行を楽しみたいと語り合い長年のご高恩に少しでも報いたいと思っていた矢先、身体を損なわれて入院、快復して帰宅され安堵しましたが再度、入院されました。お見舞いにも再三伺いある時、「食べたいものありますか」とたずね

たら「大福餅が食べたい」と言われ、持参しました。けれども病気も故もあって主治医から止められ残念そうな顔をされたのが思い出されます。再起をご家族とご祈念してましたが、容態が急変との連絡を受け駆けつけましたところ、ご家族が医師の最後になるであろう治療を見守っておられました。遠くに離れていたといえ、親の最後を看取れなかった私ですが、皆さんに人生の最後をこのように示され、静かに目を閉じられた親父さんの生涯の素晴らしさに改めて感動しました。

親父さんがご他界されて20年余り教えて頂いたものを僅かでもお返ししたいものと、私より世の中の経験が浅い方々の悩みや相談に少しでもお役にたつ様、今後も務めて参りたいと念願しています。親父さん有難うございました。



初代社長の婦人（左）と二代目社長の婦人（右）



旧色内工場の裏にある旧手宮線



旧色内工場の地鎮祭

社内レクリエーション
(旧色内工場にてバーベキュー)



明治・大正時代

明治後期

鉄工所創業者である大川元蔵（新潟生まれ）は出稼ぎのため小樽へと移り住む。手宮の硝子屋で修行を重ねていました。

富山県出身の女性と出会い、後に結婚。



初代 大川元蔵



小樽港へ来る移住民

大正元年

大川元一が誕生。

大正 8 年 4 月

大川元蔵が小樽市豊川町で、大川鉄工所を創業。

元蔵は鍛冶職人で、船の錨やご近所の方に頼まれた金物製作をする等、当時はまちの小さな鍛冶屋として営業していました。



当時の北運河地区

昭和時代

昭和 10 年 3 月

大川元一が会社代表に就任。

元一は先代の元蔵に教え込まれ技術に更に磨きをかけ、従業員 2 人を雇用して手広く商売をしていました。



当時はリヤカーによる販売が多かった

昭和 12 年 10 月

工場が狭くなってきたため、小樽市石山町に移転。

7 年後…現会長の大川紘司が誕生。

第二次世界大戦中のため、出兵させないよう、役所への届出を遅らせ、昭和 19 年 1 月 1 日を誕生日にしたという話もありました。

昭和 46 年 2 月

法人改組し、大川元一が代表取締役役に就任する。その頃の大川鉄工所は、鍛冶製品の製作と建築の金物工事などの仕事をしていました。

昭和 47 年 8 月

工場を色内に移転し、現会長の大川紘司が鉄骨製作の仕事始める。工場の人員を 10 名以上増員し、建築部門・鉄骨グループを設ける。

工場認定方法が工場の規模で決められていた頃の話(旧認定)。

当社がMグレードの認定を受けた際、見た目Rグレードと言われた経験がありました。その時、現会長は「将来Hグレードになってやる！」と、決意。



旧色内工場の落成式

平成時代

平成 2 年 2 月

代表取締役役到大川紘司が、会長に大川元一が就任。

平成 7 年 8 月

この年は不運が度重なりました。

翌年は消費税が 5 % ～ 8 % になるため、仕事の受注量も多く、まわりの方々に沢山のご迷惑をおかけする事もありました。

皆様のお支えもあり、幾多の苦難も乗り越えられました。

平成 9 年 10 月

高島フィッシュミール工場を 4 ヶ月ほどかけて改修、取得。

平成 10 年 4 月

工場を色内から高島に移転、最初の製作物件はマイカル小樽でした。

大川紘司 念願の H グレードを取得。

小樽市内で 5 社あった鉄骨製作工場も 2 社になり、小樽に 1 社は H グレードが必要と語っていた紘司の夢が叶った瞬間でした。

以後、H グレードを維持しております。

平成 17 年 5 月

本店を色内から高島へ移転。

平成 18 年 4 月

現ヤード部分の土地を取得。

10 T の橋形クレーンを設置。

平成 26 年 4 月

代表取締役会長に大川紘司が
代表取締役社長に大川晃弘が
就任。

平成 30 年 4 月 21 日

創業 100 周年記念式典を挙行。



改修前の高島工場内



改修後の高島工場内



10T の橋形クレーン



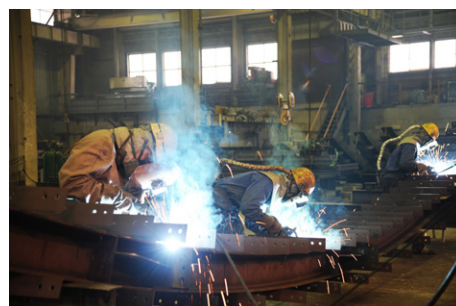
塗装工場



第二製品置場



社内レクリエーション



作業風景

「覚 悟」

大川鉄工所は、これまで時代にもなった環境の変化や、市場にもなった製品の変化、また景気変動による不変を選択して参りました。これらは、世の中の背景が大きく影響するものの、次代へつなぐための「覚悟」は変わることなく受け継がれています。

この大地に深く根をはり、これまで受け継いだ技術を新たな時代に引き継いで力を合わせて輝く未来へとつないで参ります。



初代 大川元蔵



2代目 大川元一



3代目 大川紘司



4代目 大川晃弘

一〇〇年 その先へ…

